

県中教研 美術部会だより

第 36 号

発行日 令和3年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 濱本 良子
題 字 金山 泰仁 先生

心豊かな生活を創造する

指導主事 藤田みゆき

「新しい趣味を見付けるとよい。和や伝統が幸運をもたらす。」正月番組の古いコーナーを見ていると、こんなアドバイスが飛び込んできました。長年やりたいと思いつけている着物の着付けに、今年こそ挑戦しようと思いが動いた瞬間でした。

私のタンスには、振袖や小紋、紬等、多くの着物が眠っています。母が私のために様々な種類の着物を用意してくれたからです。昔は、正月には必ず着物を着ていました。私も自然と着物が好きになり、自分で購入したのも数枚あります。しかし、もう何年も袖を通していません。もったいないことをしています。振り返れば、私は着物を着ることを通して美術と関わってきました。着物の色柄に合わせて帯や小物を選ぶことを楽しみ、造形的な視点について実感を伴いながら理解していったのだと思います。着物は、私を美術の世界へと導いてくれたものの一つです。

生活や社会の中の美術や美術文化への関わり方には様々なものがあります。これは個々の経験によって違ってきます。私たち指導者は、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、生徒が様々な経験を引き出しに蓄え、心豊かな生活を創造していく手助けをしているのだと思います。そのためには、教科の本質に迫る学習を進めることが重要です。生徒が感性や想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだす学習になっているかという視点で、授業改善に取り組むことが必要です。来年度からは新学習指導要領が全面実施となります。教育に携わっているという責任と誇りを持ち、研究と修養に励みたいものです。

私も自分の引き出しが少しでも豊かになるよう、まずは冒頭に書いた目標を実行に移すことから始めたいと思います。

(西部教育事務所)

生徒の学びを求める心に応える

部長 濱本 良子

教師になって2年ほど過ぎた頃、大村はま著『教えるということ』と出会った。中高の国語科教員として52年間勤務された大村先生の、富山や山形での講演等を収録したものである。教師としての生き方が綴られており、非常に影響を受けた。

戦後2年目。赴任した中学校で、教室不足のため2クラス100人の生徒に授業をすることになった先生は、騒いで落ち着かない生徒を前にして途方に暮れた。「静かに」と言ってもどうにもならない。意気消沈した先生だったが思い直し、新聞等から教材になるものを探した。一晩で100ほど教材を作り、翌日側にいる生徒から渡していった。問題を受け取った者から食い付くように勉強し始めた様子を見て、人間の学びを求める心の尊さを思い、それを生かすことができないのは教師の力不足に過ぎないと知った。以後、いかに言い訳をしても、子供がだめなのは、教師の不始末のせいだと自分に言い聞かせてきた。研究することは教師の「資格」と、月1回の研究授業、先生自身の胸がときめく教材発掘を欠かさなかったそうである。

今年度、東部地区澤田先生、西部地区網谷先生の研究授業、岡部先生の研究発表が行われた。各地区からは、目を輝かせて無心に制作に取り組んだり、深く考え、感じ取ったことを丁寧に伝え合ったりした生徒の姿や、発表から自身の取組を見直すことができた、などのうれしい報告があった。このことは、生徒の学びの欲求に教師が応え、コロナ禍の様々な制約の中で、生徒に感動を与えられる題材は何か、どのような指導計画、資料、声かけ等がよいのか、熱意をもって研究し、実践された成果である。

美術科は、「教えた」成果が生徒の姿となって表れやすい。生徒の姿から常に自分の指導法を見直し、学びを求める生徒の心に応えていきたい。

(氷・南部中)

第64回中学校教育課程研究大会美術部会

東 部 地 区 黒部市立清明中学校

澤田良子教諭による「材料と対話して～流木を使って～」の授業は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための配慮から、通常の美術室ではなく体育館で行われた。授業は黒部市の海岸に打ち上げられた流木から自由に発想し、加工して生き物を創造する題材であった。生徒は自分が選んだ流木の形や質感から生き物の様子を感じ取り、アイデアスケッチをしながらイメージを膨らませて制作に臨んでいた。

会場には生徒を囲むようにして、流木や動物等の写真が設置・展示されたり、接合のための用具類が用意されたりして



おり、生徒は自分が最適と思う方法で制作を進めていた。生徒のワークシートに澤田教諭のコメントが細かく添えられることで、どの生徒も次の作業にスムーズに取り組むことができた。普段から行っている生徒への丁寧な関わりが垣間見られた。

授業後の協議では、「制作の途中で生徒の手を止める場面を作らなかったことで、じっくりと制作することができた」「多くの資料を用意することで『自分にもできる』という思いがもてる手立てがなされていた」などの意見が出された。

伊勢威知郎指導主事（東部教育事務所）からは、「資料の準備がしっかりしていたことで、生徒は豊かに発想し、前向きに制作に取り組むことができた」「生徒同士が助け合って制作していたが、教師が一人の場合には個々の安全指導がより大変になる。道具の使用については、事前の配慮が何よりも大切である」などの助言をいただいた。

本年度は日程に余裕があったため、グループ協議の時間を十分にとることができた。複雑な制約はあったが、内容に深まりのある有意義な研究大会であった。

白井 理一（中・雄山中）

西 部 地 区 高岡市立牧野中学校

網谷泉教諭による研究授業は、生徒への感染予防対策のため、会場は体育館とした。また、我々参加者全員はマスクとフェイスシールドを着用し、生徒とは十分な距離をとりながら見ることとなった。

本時は葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」の鑑賞であった。プロジェクターを利用して9倍に拡大した作品と、



実物と同じ技法で刷られた模倣作品を併用して鑑賞させた。授業では、富士山をあらかじめ消しておいた作品に自分で富士山を描かせることで、北斎の表現意図に迫った。生徒は、荒々しい波の表現や描かれた人物の様子から、北斎の表現意図を各自の視点で読み取っていた。

藤田みゆき指導主事（西部教育事務所）からは、「自作資料を用いて、視点をもって考えさせたことは、分析的な鑑賞の学習に有効であった」「北斎の表現意図に迫るには、波・富士山・人の3つを関連付け、一体的に考えることができる発問の工夫が大切である」などの助言をいただいた。

研究発表では、砺波市立出町中学校の岡部俊彦教諭が、「ピンチをチャンスに～いま、美術科ができること～」と題し、休校期間中に行った実践を紹介した。岡部教諭は、学校ホームページを活用し、様々な表現方法や生徒の作品を紹介するなど、熱心に発信を続けた。また、マスクやフェイスシールドをアート化したり、感染対策をしながら鑑賞活動を行ったりするなど、まさに「ピンチをチャンスに変える」実践を数多く紹介された。

どちらも、感染症予防対策と美術科としての実践を両立させるための工夫を数多く教えてくれる提案であった。新型コロナウイルス感染拡大は、学校教育に大きな制限をもたらしたが、美術科にしかできないことがあることに気付かされた。この研究大会が、指導方法や題材を見直すきっかけになった先生方も多かったのではないだろうか。

中澤 暢雄（小・石動中）